九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

宿命の炭層

三宅, 義男
上山田炭礦

https://doi.org/10.15017/13680

出版情報：エネルギー史研究 : 石炭を中心として. 10, pp.151-155, 1979-03-03. エネルギー史研究会
バージョン：
権利関係：

宿命の炭層

三宅義男

昭和十八年七月私は飯塚炭礦の大焼新坑の採炭作業応援のため入坑した。戦争が熾烈になり、増産！増産！のかけ声で休みなしの状態であった。坑外事務職員も順番で、毎日各課から二、三人宛坑内現場に入り、真黒になって働いた。

当時私は同僚二人と朝六時半に進発所（以前は繰込場と称したが戦時体勢になって改称）で一緒になり、多数の採炭夫達のあとから人車に乗った。坑内現場は軍隊式に編成されて卸責任者が部隊長、その下に隊長、採炭夫は採炭戦士と呼んだ。

この新坑は、この炭鉱に於ける最深部の炭層である大焼累層（三尺炭勘々金弓炭四尺炭の総称）の開発のため開さくされたもので、近代的且つ大規模なもので当初計画時五十年はあるだろうと噂されていた。私達は人車が停車してゆっくりと降りた。キャップランプの光だけを頼りに歩いて行くのが心細くなった。

長い水平坑道を歩いて、それから右第一卸の右四片四尺層の払へ行くのであった。捲卸を下って行く途中には、天井から水滴の落ちるところがあるかと思うと、乾燥し切って地下足袋を踏みつけるたびにパッと白い塵埃が煙のように舞い上るところもあった。この卸は意外に傾斜が急で、下り坂とはいえ素人の私達は滑るまいとしてやや疲れを感じた。

それから右四片の捲立に着き四片坑道を歩いて奥へ進んで行きやっと目的地の四片払の戸樋口に到着した。もう払では作業が始って戸樋口から流れ出る石炭塊が炭車に積み込まれていた。私達は途中から部隊長に案内して貰って最後からゆっくりと行ったわけであるが、現場のこの凄まじい現状を見て現場作業の厳しさに身を引き締められる思いであった。何だかゆっくりして来たことが悪いような恥ずかしい思いがしたものである。

私達は現場係員の配慮で切羽には這入らず戸樋口の積込作業に加わることになった。実は切羽に這入っても却って邪魔になるというのが真意のようであった。この積込作業も不馴れの私どもには仲々容易ではなかった。切羽に沿って敷設された鉄製のトラフが、積込口近くにドンと出ているため直線に敷かれずいくつか曲って敷かれていたので、トラフの中を流れてくる石炭が、その曲り角に貯ってしまうのを素早く掬い上げねばならない。それと流れてくる石炭がトラフから飛び出してくる危険もあった。

戸樋口の炭車に石炭が一杯になると、すぐにその実函を押し出して次の空函を積込口に押し入れる。この操作が案外速くて忙しかった。この実函を押すのに私達三人でやっと動かす有様であった。この実函が脱線して車輪がレールから外れたときは全く閉口した。成木で捏ね上げても実函はビクともしない。とうとう採炭夫を二人呼んできて揚げて貰った。採炭作業は全く力のいる仕事で理屈でなくて「この力だけが必要なのだ」と痛感した。

この払で働いていた採炭夫は殆んど朝鮮人であったが、作業に熟練しコトバも通じるものが沢山居た。

私は中食の休憩時間に独りで坑道の延先へ行ってみた。掘進先にはガスの危険があるとみれて、結柵が施され注意の札が吊してあった。その時「大焼層はガスが多い」と子供の頃古老から聞いたことを思い

出した。そして坑内で一番恐ろしいのがガスであるという実感が湧いたのであった。

私達は午後五時頃一足先に作業をやめて係員について昇坑した。払から坑道を歩いて元来た急傾斜の右第一卸を喘ぎながら昇り、それからまた長い水平坑道を歩いた。この水平坑道にはエンドレスが布設してあって、そこから本卸に出たところに原炭ポケットがあった。ポケットの底に布設されたベルトコンベアが坑道に向って七段連接してあって、このベルトコンベヤーで、坑内で採掘された石炭が坑外の選炭機まで自動運転で搬出されていた。

こうした運搬系統の話などを聞きながら長い本卸を歩いて登った。初めのうちは私達も喋っていたが、喋りながら登って行くのがとても息苦しくなって、いつの間にか黙り込んでしまった。流石に隊長になると平気なもので最後まで喋っていた。永年の体験がものをいうわけであろう。

額や背中はもうすっかり汗まみれになったが、それでも歩いて登って行く外ないと観念して隊長のあとにやや後れがちに続いて行った。隊長は時々後ろを振り向き私達の追付くのを待つようにして立ち止まっては何か喋った。こうしてやっと坑口に着いた。急に膝がガクッとして前によろめいた。その途端に思わず空を仰いだ。大空は明るくまだ強い日射しであった。坑内の暗くて狭い視野の現場に比べ何と明るく広々としたものかと大空に向って何回も深呼吸した。

それから後何回か入坑した。そして同じ右第一卸の左六片の払に行ったとき、切羽にドンがいくつも出ていて、採炭作業の能率があがらず、現場係員の苦労している姿を見て同情にたえなかった。素人の私にも六片坑道を歩きながら、盤膨れやドンの実態がよく判ったくらいであった。然し「戦力増強は石炭の増産から」という至上命令の前には、こうした悪条件などに拘泥してはいられなかった。全員が一トンでも一塊でも多く出さねばならないという心構えであったからである。

そしてまた入坑の順番が回ってきて一カ月ちかく経った。この頃もう応召者続出で私達も仕事に追われ入坑の回数が少くなってしまった。それから間もない十九年三月に右第一卸右六片の坑道延先において、発破作業終了直後にガスの突出があり、引続き右五片（六片の上部）附近でガス爆発と坑内火災が発生した。私達が以前採炭の応援に這入った右四片のすぐ下部が右五片であると思ったとき、あの右四片払で働いていた人達の黒い姿がありありと目の前に浮んできた。

この変災によって採炭夫の死傷者四九名を出し、その外官庁の係官二名の殉職があった。

大焼累層というのは、飯塚炭鉱でいえば国鉄上山田線に略平行して流れている碇川に沿った線上にその露頭があって、東南に約十八度ぐらいの傾斜で嘉麻川の線に向って広く賦存した炭層群である。その上層には浅部から竹谷累層、三尺五尺累層がある。したがって最下層がこの大焼累層である。

そしてこの大焼累層は両隣の住友忠隈炭鉱、麻生吉隈炭鉱へ続いている。勿論断層や無炭区域が介在しているだろうし、又炭層の厚さや炭質等にも多小の差異はあろうが、兎に角これら三つの炭鉱に跨っているわけである。

そして嘉麻川の支流山田川沿線附近で断層によって切り上がったのが、三井山野炭鉱などによって採掘された大焼層と思えば大体の見当がつくと思う。

この大焼累層は、これらの炭鉱の最深部にあるから、この大焼累層を採掘したらもうその下には炭層はない。それから先は逆戻りして上層部の残炭区域や坑口に近い保安炭柱を採掘する外ないことになる。

私が小学生の頃第一次大戦の好況の波に乗って開発された帝国炭業（当初鈴木商店）神之浦炭坑でこの大焼層を採掘していた。大正十年頃であったかこの炭鉱の第一坑坑内でガス爆発が起り、坑口に多数の人が集って騒いでいた記憶がある。

そのころ古老から、この近くから出た石炭でガラ（石炭塊をむし焼した家庭燃料）を焼くと、硫黄分が多くてとても臭く、咽喉が痛くなるようであったという話を聞いた。大焼層の露頭から浅い所を掘っていたのであろう。こうしたことで大焼層の石炭はガスが多いこと、そしてガスによる変災のことが強く印象づけられて、大焼層と聞くとすぐにガスを連想して何か不安な気を起すようになってしまった。

神之浦炭坑で採掘していた大焼層の鉱区の鉱業権は色々な経緯があって後に飯塚炭鉱に移り、日支事変勃発後再び開坑され更に新坑として大規模な大焼層の開発になったものであるが、大正年間神之浦坑の大焼層採掘でガス爆発があり、何十年かの後に同じ区域の大焼層採掘でガス爆発が起っていることを思うと、どうも大焼層にはガスの変災がつきものだろうかと妙な気がするのである。

隣の住友忠隈炭鉱でも前後してやはり大焼累層の採掘が最終段階までされていたように思われる。その坑内でガス爆発の事故があったことは聞かないが、他の炭層に比しガスは可成り多かったのではあるまいか。

もう一つの隣の麻生吉隈炭鉱では筑豊の炭鉱が次々に閉山していく頃、最深部の開発をするとして竪坑の掘さくが始まり、立派な櫓ができあがって選炭機も増強されるなどビルド鉱として再建が計画されているという話であった。

私は汽車で碓井駅を通るとき、この新しい一連の施設を見るたびに、一体どうしたことだろうかと内心不思議でならなかった。それは私独りではあるまい。多くの炭坑マンから同様のことを聞にしたものである。飯塚炭鉱では大規模な計画のもとに設備もしたが、ドンや無炭区域が多くその上焼化し、その期待を大きく裏切ってしまった。終戦後カッペの使用が始まった頃私はその見学に再び大焼層の払に這入ったことがあるが、払の条件は極めて悪かった。こうして坑命は当初予想を短縮してしまい、加えてガス爆発などの変災の記録まで残している。そして忠隈炭鉱も大焼層の採掘終了後遠からずして閉山したものと思われる。それなのにこの吉隈だけが、今からビルド坑として最深部の大焼層を採掘できるような条件にあるのだろうかと、吉隈炭坑の坑内事情をよく知らないままにそんな気がして同僚と話合ったものである。

吉隈炭鉱のビルド計画に先立って、三井山野炭坑では新しく竪坑（たてこう）が開さくされ昭和三十九年四月頃から大焼層の開発が始っていた。そして第二会社の山野炭鉱（株）になり、引続いて大焼層の採掘が進んでいた。第二会社が設立されて間もなく社用で幹部の方に会ったことがあるが、残念ながら坑内見学まではできなかった。

その後同鉱の坑内請負組の関係者やその組の従業員に坑内現場の模様をたずねたことがあるが、曾て飯塚炭鉱の大焼層採掘現場が思い出されて、条件の悪い採炭現場の苦労が想像できた。

そして山野炭鉱も大焼層に移ったから、もう永く続くまいと他事（よそごと）ながらそんなことを考えたものである。そうしているうち四十年六月山野炭鉱のガス爆発が起った。

当時私は夕方町の理髪店で散髪中少し遅れてM市長が這入ってきて私を見るなり「三宅さん、山野炭鉱では大きな坑内事故が起ったらしいぞ！」と話しかけた。私はそれを聞いたとき「あゝガス爆発に違いない！」と直感した。

案の定その日のテレビで大変災の模様が報道された。死者二三七名負傷者二九名という大惨事で政府からも通産大臣が現地に急行するな

ど官民挙げての騒動であった。四十八年三月であったか山野炭鉱は閉山したが、遺族側から提起された訴訟問題がまだ続いているという。

前後するが山野炭鉱の西南に当る上山田炭鉱でも明治三十三年頃から大焼層の開発が計画され、同系の飯塚炭鉱から従業員を転換させ炭住を移築するなどして探炭を開始したが、三十五年頃将来発展の基礎とされていた大焼層探炭は全面焼化帯に逢着してこの計画は挫折した。

大焼炭層！それは筑豊炭田の一角の地域に賦存した炭層であるが、それを採掘した大きな炭鉱がいくつもその開発に充分な成果が得られず閉山した。その上ガス爆発という惨事を起している。

昔の炭鉱では坑内湧水で炭山（ヤマ）の運命を左右されたそうだが、ポンプの移入でその難を克服した。然しガスに対しては遂に防禦の方法が出現しないままに終ったといえよう。

大焼炭層！それは戦時戦後の激動の時期に各鉱とも困難な採掘を強行しなければならなかった炭層であり、そして遂には抗命を縮め大なり小なり坑内事故を起したそんな宿命の炭層であった。

炭層柱状図（略図）

（飯塚炭鉱）

竹谷累層	浦田八尺三枚炭 浦田八尺上層炭 浦田八尺本層炭	m 181.59
三尺五尺累層	尺無炭 一枚炭 七ヘダ炭 三尺炭 上ドマ下ドマ炭 五尺炭 盤下炭	m 171.43
大焼累層	三尺炭 勘々金弓炭 四尺炭	m 129.76

炭丈合計
m
18.09

(注) 麓三郎氏著、『三菱飯塚炭鉱史』付表より

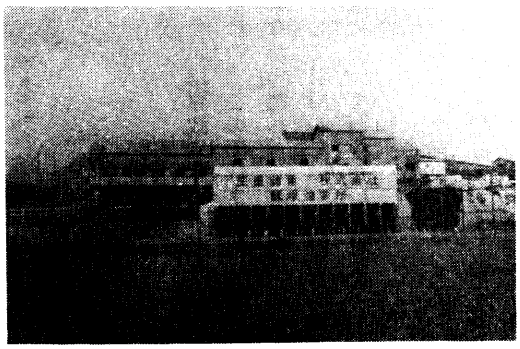
炭層略図

（上山田炭鉱）

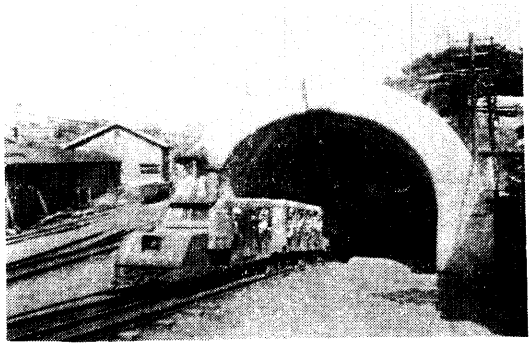
累層	下五尺 上二尺
大焼累層	下二尺 五尺 三尺 帯無 七ヘダ八尺 大焼四尺

上累石層	下臭石
竹谷累層	尺無 三尺 竹籔八尺上層 〃〃下層 〃五尺上炭 竹籔五尺
三尺五尺	上三尺 四尺上層 四尺下層 七尺 二尺 六尺 上五尺 八尺 下五尺上炭

(注) 野田光雄氏「筑豊炭田山田附近の地質構造」より



大焼層開発に伴い新設された選炭機



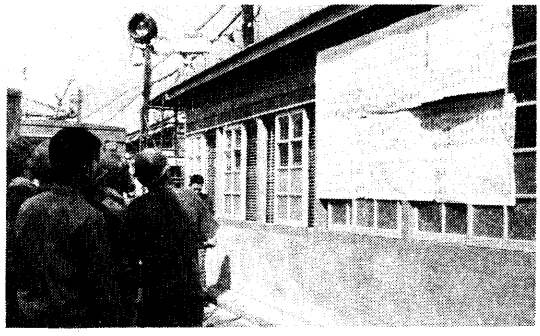
昭和18年7月この人車に乗って入坑した。

左の二枚の写真は飯塚鉱業所の分ではありません。
他の炭鉱の分を参考につけたものです。
（戦時中この種写真は撮れませんでした）

同　風管（ゼクト用）

ガス爆発後のキャップランプ

山野炭鉱ガス爆発当時坑口附近



山野炭鉱ガス爆発被罹災者名簿掲示